

7年前になる。戸田日晨氏は脱走した僧の一人から事件当時の行堂内の動きについて証言を得た。その老僧は62年前のことながら、なまなましく事態を語った。

「入行して何日かすると、堂内で飯がまずいと評判をたてる者がいた」

「人行早々から脱走するという話が堂内で流れ始め、久村諦道は初行僧に対し各県から脱走の為の代表を出せという指示をしていた」

久村諦道氏は脱走の首謀者であり、自身も初行であった。組織的に動こうとしていたことがわかる。

「石川県の代表になった宿波本積がいろいろ不満を作って、退堂を叩いたり、そのかしたりしていた」

脱走の7日前、当時の先輩僧たちは、初行僧が行堂肅清の名目で伝師の命や自分たちの指導に服さず、行法を無視するなどの騒然たる堂内の様子を嘆願書にしたためている。そのなかに「外的な力」が働いているようだとの推測もあった。

「主に東京・関東の人達が画策をして、宗門の上の人々と連絡を取り合ってやっていたようだ」

「どんなふうに出るのかという、細かい指示も佐藤(憲俊)初行代表からあり、久村諦道の計画通り脱出に至った」

日蓮宗の教団幹部が関わった計画的なものであることが窺われる。

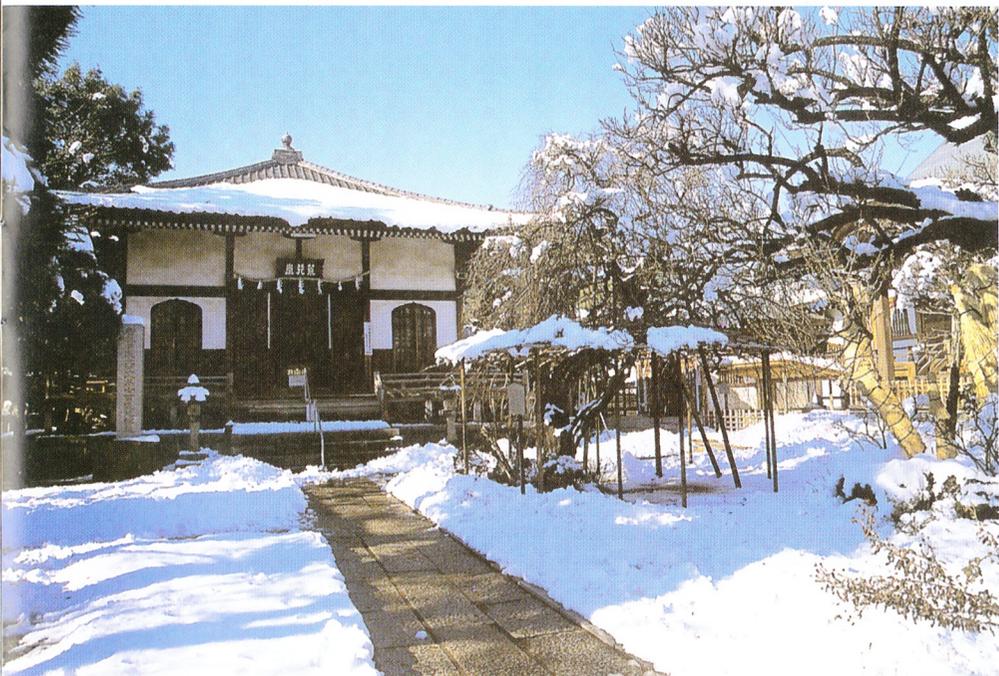
「脱走の瞬間、つかい棒を開けて法華経寺に向かった。法華経寺の当時貫首だった宇都宮日綱は、『おう、よく来た。あなた方は気鋭の青年僧である』と言った。(法華経寺)奥之院の東日教も来ており、その後は各々が勝手に水をかぶったり、講義を聴いたり、木剣の修行をした」

脱走を目標した再行僧によると、突然、初行僧数十名が頭に布団をかぶり土塀を次々と乗り越えてゆくのを発見した。「お前たち、なにをする気か！」と言うと、首謀者らしい初行僧が「俺たちにはお偉いお方が応援してくれるんでえ」と捨て台詞を残し、ほかの初行僧を先導していったという(戸田氏が1977年4月聴取)。瞬間的、一気に54人が脱走したさまが彷彿とする。宇都宮氏の応答をみると明らかに事前の打ち合わせがあったことがわかる。初行僧たちが籠る場所や食事などに困ったという話はない。なお「木剣」とは日蓮宗の祈祷法である。

証言者の初行僧は遠壽院に残ろうと思っていたが、

「帰山の時、同県人が誰も来てくれなくなると思い、いっしょに脱出してしまった。県内の坊さんと仲良くなっていないと、帰山してから組で動いているので、不安感が常にあった」

生活支配に及ぼす地域宗門のしがらみが、僧としての正邪の判断を曇らすことをい



雪の日の遠壽院